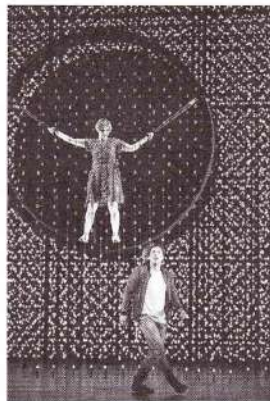


の美しさへの渴望に苦しめられたが、先入観のない若い世代にはフィットするのかもしれない。ドヴレット・ヌルゲルディエフがタミーノの叙情的なフレーズを歌う時のみ、「モーツァルト・レガート」を楽しめた。

クリスティーナ・ガンシュのパミーナは、ドイツ語テキストの際立たせ方が心地よく、パバゲーノのジョナサン・マックゴヴァンは芸達者で、ドルトムント合唱アカデミー少年合唱団の童子も大人のプロ歌手以上の大役を果たすなど、彼らがいてこそ実現した演出と言えよう。

この《魔笛》は今後も上演が続くので種明かしは避けるが、タミーノに課せられる「試練」を、思春期から大人へ移行する際の葛藤などと重ねて描いている。高音を軽く完璧に当てることのできるクリスティーナ・ポウリチの夜の女王と、柔らかい低音を持つアンドレア・マストローニのザラストロのアリアは、高く設置されたオーケストラ・ピットで歌い、その映像が舞台上に電飾でアップされる。最近流行の映像活用演出の集大成といえるハイレベルな使い方で、オペラ初心者でも楽しめるエンターテインメントだった。

(中 東 生)



シュテッケルの演出は映像と電飾を駆使したものだった © Arno Declair

## Opera ハンブルク州立歌劇場が34年ぶりに新演出《魔笛》

ハンブルク州立歌劇場34年ぶりの新演出のモーツァルト《魔笛》は、映像と電飾を駆使したイエッテ・シュテッケルの演出で、実現に漕ぎ着けるまで劇場関係者の頭を悩ませたものだが、満席の観客を楽しませていた(10月12日所見)。

ジャン=クリストフ・スピノージの指揮はロッシーニのようなアプローチで、スピード感のあり過ぎるテンポとアゴギク多用など、伝統的なモーツァルト